

バイロンの初期の三つの詩について

布施伸之

— mein Herz habe ich allein.

「——が、ぼくの心はぼくだけのものだ。」

『若きウェルテルの悩み』ゲーテ

序にかえて

バイロン(George Gordon Byron,1788-1824)の初期の詩を三つ取り上げ鑑賞してみたい。いずれも小品ながら、失恋には終わったが最も幸福であったひと時を彷彿させる忘れがたい作品をはじめ、バイロンをほぼ生涯にわたって襲った生の苦悩が痛々しく表現された作品などを鑑賞し、彼の苦悩が何であったのか、その一端を探ってみたい。

I

Fragment

Written shortly after the marriage of Miss Chaworth

Hills of Annesley! bleak and barren,
Where my thoughtless childhood stray'd,
How the northern tempests warring,
Howl above thy tufted shade!

Now no more the hours beguiling,
Former favourite haunts I see;

Now no more my Mary smiling

Makes ye seem a heaven to me.

大意：

アンズリーの丘陵よ！寒風吹き荒ぶ、不毛な地よ！

子供時代の考えなかったぼくがさまよった地よ！

猛り狂う北の嵐が

木立の陰となったお前の上で何と吹き荒れていることか！

ぼくを和めてくれたあの時も今や再び戻ってはこない、

通いなれたとっておきの丘陵は今やこうして眺めるのみ。

ぼくのメアリの微笑みも最早戻りはしない、

お前をぼくの楽園にしてくれたのに。

メアリ・チョワースは、バイロン家の遠縁にあたるチョワース家の娘。チョワース家はバイロンが大伯父から相続したニューステッドの領地の隣に屋敷を構えていた。バイロンは1803年の夏、ロンドンで初めて彼女に会い、翌年ハーロー校の休暇に帰省し彼女を激しく慕うようになったようだ。この時バイロン16才、メアリはバイロンより2才年長であった。メアリはこの時すでに婚約しており、この恋はバイロンの一方的なものであったようだ。伝えられているところによれば、バイロンは、女中にバイロンのことでからかわれたメアリが、“What! Me care for that lame boy!”（「えっ！わたしがあのびっこが好きですって！」）と言っているのを偶然立ち聞きしてしまい、彼の恋は終わったという。メアリーは、1805年 John Musters という地元の男性と結婚したが、無頼で粗暴な夫であったために離婚。後年バイロンのことを懐かしがっていたという。バイロンはメアリに恋をする以前からそれに類する感情を複数の女性に対して抱いていたが、メアリは事実上の初恋の相手とみなされている。

この作品は失恋の悲しい歌であるにもかかわらず、バイロンにしては珍しく

女性に対する優しさが表われていて、読者を引き付ける。

Hills of Annesley! bleak and barren,
Where my thoughtless childhood stray'd,

この詩行の、チョワース家の屋敷 (Annesley Hall) があるアンズリーの丘陵に吹き付ける木枯らしは、夏の間恋が破綻し、今やバイロン自身の心にぽっかりと生じた虚空を吹き過ぎる虚無の風でもあろう。夏の恋が成就していれば秋には実をつけたにちがいないのに、その恋が実を結ぶことなく終わり、荒涼とした風景の中で木枯らしに吹かれるままに独り立ちつくしているバイロンの姿が目には浮かんでくる。頭韻を構成している bleak and barren の響きにそれがよく表現されている。

何故恋が成就しなかったのか。その理由は Where my thoughtless childhood stray'd, という一行がよく伝えている。伝えられているところによれば、二人は両家の領地境でしばしば逢瀬を重ねたということである。さらに、上の詩行の stray'd という語からすると、バイロンはしばしばメアリの屋敷近くに足を運んだのかもしれないし、恐らく屋敷にも出入りが許されていたのであろう。従って、バイロン自身としては、メアリも当然自分を憎からず思っていると思っていたようだ。ところが、メアリは真剣ではなかった。バイロンの一方的な片思いであったのだ。それが thoughtless という語に表わされている。ここでは「思慮が足らず浅はかな」くらいの意味であろう。この語が childhood とともに用いられていることによって、わたしたちは、「びっこを好いてくれる女の子がいると考えるなんてやはり俺はまだねんねだった。」とでも述懐している16才のバイロンの姿を窺い知ることができるのである。この一行は、負い目と諧謔の精神で染められてはいるが、不首尾に終わった恋に対する慙愧の思いが、抑制された言葉で巧みに表現されている。

How the northern tempests warring,

Howl above thy tufted shade!

木立が激しく揺れて陰をつくっているアンズリーの丘陵に、嵐と嵐が幾重にも襲って来て、さながら戦場のように激しく逆巻いている。この二行は、秋から冬にかけてのイングランド北部の気候風土の荒々しさをよく伝えているが、同時にここでは、実の伴わない夢まぼろしの陰 (shade) のごとき恋愛にうつつをぬかしていた自分自身を激しく責め苛み、「苦痛に耐えかねて叫び声を発している」——第4行目の howl にはそのような意味もある——バイロンの絶望的な姿も読みとることができ、痛ましい。かつてはバイロンにとっては全てであったアンズリーの丘陵が、メアリとの恋が破綻し彼女が去った（註1）ことで、今や存在感も消え、幻影としか彼の目には映じていないことを shade という語がよく伝えている。

Now no more the hours beguiling,

Former favourite haunts I see;

Now no more my Mary smiling

Makes ye seem a heaven to me.

メアリと語り合い一緒に過ごした時間は、バイロンにとって気持ちを和めてくれるものであった。その彼女がバイロンから立ち去った今、最早あの幸福な時は帰来ぬのである。だから、かつて足しげく通ったアンズリーの丘陵（屋敷）を訪れることもなくなり、今や遠くから立ちつくしてそこを眺めているのである。バイロンにとって欠けがいのない大切な存在であった——第7行目の Mary に何げなく添えられている my はそれをよく暗示している——メアリが彼に親しくほほえみかけてくれると、バイロンは我を忘れ幸福感に浸ることができたのであろう (smiling と beguiling との脚韻はそのことをよく伝え

てくれており、効を奏している)。そのようなメアリのいなくなったアンズリーの屋敷はバイロンにとっては最早樂園ではないのは当然である。

さて、先に触れた負い目と諧謔とは、バイロンに生涯付きまとう自意識から発した感情と精神である。そしてその自意識の最大の根源は、足がいわゆるエビ足であったという身体的なハンディキャップであった。「びっこ！」と一笑に付して、バイロンにとっての致命的な急所をついたメアリに対して少なくともこの作品のなかでは、何らの怨みごともバイロンが口にしていないのには理由がある。その理由を探る手がかりは上で挙げた第2連に求められるようだ。その一つが、メアリと過ごした時は *the hours beguiling* であったこと。そしてもう一つは、メアリの微笑みが彼にとってアンズリーの丘陵を *a heaven* にしてくれたことだ。バイロンのような自意識家にとって、自分を和ませてくれ、天国にいる境地にさせてくれるものほど、欠けがいのないものはなかろう。それゆえにバイロンが、

“Had I married Miss Chaworth, perhaps the whole tenor of my life would have been different.” (「チョワース嬢と結婚していたら、自分の人生全体も違った方向に進んでいたことだろう。」) (註2)

と述懐しているのに出会うと、わたしには、この「断片」と題された詩を読む限り、バイロンのこの言葉には何らの虚飾も混じっていないように思えるのである。メア리를歌った詩は他にもあるが、「断片」と無造作に付けられたタイトルにもかかわらず、バイロンの処女詩集 *Hours of Idleness* (『懶惰の時』、1807年) の中に彼の数々の恋愛詩に混じって収録されている訳は、これが極短い小品にもかかわらず詩としての完成度が高いからである。それに加えて、この作品には、彼には希なほど素直な心情が吐露されていて、あたかもバイロンは、メアリ不在による淋しい気持ちが測らずも虚心に表現されてしまったことに気付かないほど、推敲に凝ったのではなかろうかと思えるほどである。バイ

ロンのことであるから後になってそれに気付か思わず苦笑したことであろうが、これに寄せる愛着捨てがたかったのであろう。

このように、この作品にはバイロンの他の作品には希な、固有な魅力があればこそ、読み手に一読後思わず心の中で作品を顧返させるのではあるまいか。メアリへの恋心はバイロンの生涯忘れられぬ幸福な瞬間であったのであろう。その後のバイロンの内的・外的な様々な営為の多くは、その幸福を再び取り戻すために繰り返される際限も無い戦い、失われた楽園回復の絶望的なほどの苦しみ、とみてよいであろう。

II

To M. S. G.

When I dream that you love me, you'll surely forgive;
Extend not your anger to sleep;
For in visions alone your affection can live,—
I rise, and it leaves me to weep.

Then, Morpheus! envelope my faculties fast,
Shed o'er me your languor benign;
Should the dream of to-night but resemble the last,
What rapture celestial is mine!

They tell us that slumber, the sisiter of death,
Mortality's emblem is given;
To fate how I long to resign my frail breath,
If this be a foretaste of heaven!

Ah! frown not, sweet lady, unbend your soft brow,
Nor deem me too happy in this;
If I sin in my dream, I atone for it now,
Thus doom'd but to gaze upon bliss.

Though in visions, sweet lady, perhaps you may smile,
Oh! think not my penance deficient!
When dreams of your presence my slumbers beguile,
To awake will be torture sufficient.

大意：

君がぼくを愛する夢をぼくが見ても、君はきっと許してくれるだろう。
君の怒りを眠りにまで及ぼさないでくれ。
というのも君の情けをいただけるのは夢の世界しかないのだから。
目覚めれば、ぼくにあるのは泣き悲しむことだけなのだから。

だから、人間の夢を見せてくれるというモルフェウスよ！

ぼくの諸々の機能をはやく包み込んでくれ、
ぼくの上におまえの恵み深いけだるさを降り注いでくれ。
今晚の夢が昨夜のものと瓜二つであるなら、
ぼくの眠りはまさに天上の歓楽となることだろう。

伝によると、死の姉妹のまどろみは、
死すべき運命にある人間のしるしとか。
何ほどかこのもろいぼくの命を運命の手に委ねたいことか、
もしこのまどろみが天上での永眠を予め味わうことになるのなら。

ああ！美しい人よ！顔をくもらせないでくれ。情け深い君の眉をひそ
ませないでくれ。

まどろみの中にあってぼくがとても幸福であるとは思わないでくれ。
たとえぼくが夢の中で罪を犯したとしても、目覚めている今この時が
ぼくには償いなのだ、
ご覧の通り、ぼくの定めは至福の対象たる君をただじっと見つめるこ
とだけなのだから。

美しい人よ！夢まぼろしの中であっても、君がほほえんでくれますよ
うに。

おお！ぼくの償いが不十分だと思わないでくれ！
今夜君が夢に現われてぼくを和ませてくれるなら、
目覚めることは十分の責め苦となることだろう。

つれない女性に寄せたバイロン19才の、ケンブリッジの学生時代の作品。タ
イトルの M. S. G. は相手の名前ではなくて、バイロンの原稿ということを示
しているようだ。というのも、手書きの原稿には、“G. G. B. to E. P.”
という題がついており、これは、George Gordon Byron to Elizabeth Pigot
と綴れるということだ。(註3) このエリザベスという女性は、バイロンの母
親が1804年から3年ほど暮らしていたサウスウェルで交際していたピゴット家
の娘。バイロンに詩作を勧め、文学への励ましを与えたという。彼女は一生を
独身で暮らしたということだが、彼女についての詳細はよくわからない。いず
れにせよ、この作品は、特定の経験が凝縮されて作られている前作の「断片」
とは異なり、そのエリザベスという女性について何も知らなくても、鑑賞する
のにさほど不都合はなさそうだ。

というのも、この作品の中心主題は、バイロンの思いを一向に意に返すこと
のないその女性に業を煮やし、払い背に擲擲しようとするのではないからだ。

無論そのようなバイロンの諧謔的態度はこの作品にも窺い知ることができるし、それはバイロンの精神の働きのひとつの特徴であることも確かであるが、この作品の主題と言える程ではない。この中心主題は、ある女性にかこつけて暗に表現されているバイロン自身の個人的な苦しみであると言えるようだ。

For in visions alone your affection can live, —
I rise, and it leaves me to weep.

バイロンにとって目覚めているとき（現実）は、悲しみでしかない。

Then, Morpheus! envelope my faculties fast,
Shed o'er me your languor benign;

モルフェウス（ギリシャ名モルペウス）はギリシャ神話の夢の神。眠りの神ヒュプノスの三人の息子のひとり。その兄弟はそれぞれ人間に夢を見せる能力があるが、モルペウスは人間の夢を見せる能力があるという。この三兄弟は大きな翼で音も無く飛翔するという。

さて、上に挙げた二行は、意中の女性の夢を見ることが出来るようにモルフェウスに懇願しているところであるが、それにしては、この envelope の響きがこの詩行のリズムを乱すほど悲痛味を帯びているのはおかしい。これは、この第一義の奥に潜む、バイロンの真意を彼自身が承知の上で故意にあらわにしているからであろう。ここの envelope は他の新しい版では envelop に改められているのもあるが、二つを試しに韻律分析してみると、

Then, Morpheus! envelope my faculties fast,

Then, Morpheus! envelop my faculties fast,

となる。後者の規則通りのリズムでは、バイロンの真意はまったく伝わらない。従って envelope の場合の方が、モルフェウスに懇願するバイロンの気持ちが深刻で、抜き差しならぬ、追い込まれた状態にあることを読み手に伝えてくれるばかりでなく、弱音が三つ続いた後の faculties が強烈に響き、モルフェウスに向かって、今すぐにもその大きな翼で自分（の機能）を包み込み、恵みとなる眠りをもたらしてくれるように、嘆願していることがよくわかるのではないか。バイロンはなぜ覚醒から逃れねばならないのか。

If I sin in my dream, I atone for it now,
Thus doom'd but to gaze upon bliss.

あるいは、

To awake will be torture sufficient.

このように、目覚めているだけで彼には十分苦痛であり拷問の苦しみであるからだ。現実世界は彼にとっては苦しみをもたらすのみで、思いをかなえてくれる場ではない。バイロンにとって生きていることは地獄であるのだ。モルフェウスに悲痛な叫びを発してまどろみを嘆願しているのも、一刻も早くこの生き地獄から逃れたいからだ。ここにはバイロンの特徴をなす自意識の問題がすでに現われている。バイロンを自意識の生き地獄に陥れる元凶の正体は何か。それが次の詩で示されている。

III

Fill the Goblet Again

A Song

Fill the goblet again! for I never before
Felt the glow which now gladdens my heart to its core;
Let us drink!—who would not?—since, through life's varied
 round,

In the goblet alone no deception is found.

I have tried in its turn all that life can supply;
I have bask'd in the beam of a dark rolling eye;
I have loved!—who has not?—but what heart can declare,
That pleasure existed while passion was there?

In the days of my youth, when the heart's in its spring,
And dreams that affection can never take wing,
I had friends!—who has not?—but what tongue will avow,
That friends, rosy wine! are so faithful as thou?

The heart of a mistress some boy may estrange,
Friendship shifts with the sunbeam—thou never canst change:
Thou grow'st old—who does not?—but on earth what appears,
Whose virtues, like thine, still increase with its years?

Yet if blest to the utmost that love can bestow,
Should a rival bow down to our idol below,

We are jealous!—who's not?—thou hast no such alloy;
For the more that enjoy thee, the more we enjoy.

Then the season of youth and its vanities past,
For refuge we fly to the goblet at last;
There we find—do we not?—in the flow of the soul,
That truth, as of yore, is confined to the bowl.

When the box of Pandora was open'd on earth,
And Misery's triumph commenced over Mirth,
Hope was left,—was she not?—but the goblet we kiss,
And care not for Hope, who are certain of bliss.

Long life to the grape! for when summer is flown,
The age of our nectar shall gladden our own:
We must die—who shall not?—May our sins be forgiven,
And Hebe shall never be idle in heaven.

大意：

また酒杯を満たしてくれ！これほど心底俺の心を喜ばせてくれる
快い酔いを一度も感じたことがないから。

呑もうじゃないか！——呑まない奴などいるものか。——人生の様々
な場面を見回して、

偽りが無いのは酒杯の中だけだから。

俺は人生が与えてくれるものを次々と何もかも試してきた。
魅惑的によく動く黒い瞳の視線を浴びてぼーとなったこともある。
恋もした！——恋のしたことのない奴などいるものか。——だが、

恋をしている時に、愛の法悦び^{よろこ}が確かに存在したと実感できる者がいるだろうか。

俺の青春時代、心が春たけなわにあって、
愛情は永久に続くものと夢想していた時、
俺にも友がいた。—— いない奴などいるものか。—— しかし、ばら色の
ワインよ！

お前ほどの信義に篤い友がいたら、誓って言える者がいるだろうか。

女の心は、どこぞの若者の恋愛に水を差し、
友情はお天とう様の動きに合わせて変化する。お前だけだ、決して
変わらないのは。

お前は年を重ねる。—— 年をとらない奴などいるものか。—— しかし
一体、お前のように歳月とともにさらに美質を増すものがあるだろうか。

とは言え、もしも愛が授けうる至上の法悦びにこちらが恵まれると、
恋仇は地獄の邪神に神だのみにおよぶことだろう。

俺たち人間は嫉妬のかたまりだ！—— 嫉妬しない奴などいるものか。
—— ところがお前にはそのような卑俗さがまるでない。

というのもお前を楽しむ者が多ければ多いほど、ますます俺たちは陽
気になるのだから。

だから、青春期とその張ったりの季節が過ぎると、
慰めを求めて結局酒杯に飛びついてしまうのだ。
すると、そこに見いだすのだ—— 見いださないことなどあるものか。
—— 五臓六腑に滲みわたる液体の中に見いだすのだ、

眞実は昔のままに杯の中だけにあることを。

パンドラの箱がこの世で開けられ、
歓喜を制した苦痛の勝利となった時、
希望は立ち去った。——立ち去らなかつたものか。——しかし、俺た
ちは酒杯に口を触れると、
希望などどうでもよくなる。というのも、お前を口にしたので、無上
の喜びを確信するからだ。

ブドーよ永遠に！というのも夏が飛び去ると、
うま酒に年が加わり俺たち自身の老いを慶ばせてくれるから。
俺たちは死なねばならない。——死なない奴などいるものか。——俺
たちの罪が許されるといいのだが、
天国へ行けたら、神々の女給ヘーベを怠けさせはしないぞ。

この詩はバイロンがケンブリッジの学生であった20才のころに書かれた。わたしには力量がなく訳し出すことができないが、原作は非常に頹廢的で虚無的な調べに包まれている。20才の青年がこれほどの荒んだあるいは老成した気分の詩が書けるものかと驚くばかりである。そのような調べないし気分を醸し出している源は、この詩の形式と内容の関係の在り方にあると言えよう。すなわち、弱弱強のリズム (anapaest) が内容と見事に融けあって形式と内容とが一致している在り方と、他方形式と内容とを一致させずに履き違えさせている在り方の二通りがあるが、これらのいずれとも、この作品の頹廢的な雰囲気と詩人の絶望的な気分とをいやがうえにも引き立てており、読者を悲痛ないたまれぬ気持ちにしてしまうのである。前者の例を挙げると、

~~~~~  
In the goblet alone no deception is found.

形式が内容（意味）と一致している。また、goblet, alone, no の中で繰り返されている [ɔ] と [OU] の類音は、深い絶望の淵の奥底から、籠もりがちに重々しく、とはいえ力弱く響いてくるバイロンの虚無と厭世の叫びが連想できる。あるいは、

Hope was left, -was she not? -but the goblet we kiss,

では、Hope was left, に特に痛ましい響きがある。この響きからバイロンの絶望の程度がどれほど深刻であるかがわかる。これまでバイロンは絶望の気持ちに打ち勝つために、いろいろなことを試してきた。

I have tried in its turn all that life can supply;

ところで、この行の後半部、

all that life can supply

の響きは、機会を捉えてあれこれ試したが、結局満たされることなく、極度の脱力感と倦怠感に襲われただけにすぎないバイロンの深い溜息であろう。この一行はその世紀末のフランスの詩人マラルメの気分を先取りしている。

La chair est triste, hélas! et j'ai lu tous les livres.

大意：

ああ！肉体はかなし、われは全ての書を読みたり！

さて、次に、形式と内容（意味）を一致させず、意図的に履き違えさせることによって、バイロンの絶望感を効果的に引き出すことに成功している例を挙げ

てみよう。

Fill the goblet again! for I never before

Felt the glow which now gladdens my heart to its core;

この冒頭二行の響きは、生に倦み、絶望の深い淵の中にいるバイロンの鬱念とした様を伝えている。取り分け、冒頭部、

Fill the goblet again!

には、読む者をして深い戦慄を覚えさせずにはおかない天才的な極意が感じられる。試しに次の例と比較してみよう、

Fill the goblet, please.

このリズムでわかる通り、こちらの場合は、字義通り酒を楽しみ、人生を謳歌している者の発言である。これと比較すれば、バイロンの言説は、表面的な字義では同じにみえても、これとは全く異なる気分を伝えていることがわかるであろう。バイロンには人生が面白くないのだ。生は苦痛であり、生き地獄であるのだ。だから酒もおいしくない。少しも酔えない。でも酔えないとわかっていながら、呑まざるを得ないバイロンの心持ちが、弱弱強のリズムによって、明らかに伝えられている。

さて、もう一つ履き違えた例を挙げてみよう。

We must die—who shall not? —May our sins be forgiven,



この後半部、

May our sins be forgiven,

もやはり、例えば、

May he rest in peace!

という碑文にしばしば見られる祈願文の響きとは、まるで正反対の気分を伝えているのが、リズムからよくわかるのである。ここにはバイロン特有の諧謔も込められているとはいえ、バイロンの願いが叶うのは絶望的であるようだ。

ところで、バイロンの絶望とは何か。この詩はその正体を教えてくれる。

Let us drink!—who would not?—since, through life's varied  
round,

I have loved!—who has not?—but what heart can declare,

I had friends!—who has not?—but what tongue will avow,

Thou grow'st old—who does not?—but on earth what appears,

We are jealous!—who's not?—thou hast no such alloy;

There we find—do we not?—in the flow of the soul,

Hope was left,—was she not?—but the goblet we kiss,

We must die—who shall not?—May our sins be forgiven,

(下線筆者記す)

あえて全て列挙したのはその存在の執拗さを確認したかったからである。このように、全ての連の中に入り込んで、バイロンのすることなすことすべてに異を唱え、口を差し挟み、冷笑しながら彼の足を引っ張る存在が彼の内部にいるのである。すなわち、彼の絶望の元凶は彼の心に宿っている思惟する存在あるいは思惟そのものである。

### 結びにかえて

ロマン主義は合理主義に対する反動・反発と解されることが多いが、バイロンの場合それは正鵠を射ていない。彼は他のロマン主義の詩人たちとは異なり、合理主義的精神を多分に備えていた。例を挙げれば、諧謔的な批判精神の旺盛なこと、バイロンの尊敬する詩人がサミュエル・ジョンソンであること、あるいは同時代のロマン主義の詩人たちへの無視や無理解、決まりきった常套表現の多用、などからそのように言えるのである。結論を言えばバイロンは、むしろ合理主義もしくは合理主義的思考による被害者あるいは犠牲者と言えよう。

財産目当てにたらしこまれたスコットランドの名門貴族の娘が、新妻をまったく顧みない放蕩の夫との間に産んだびっこの子供がバイロンであった。その父親がフランスで客死したのは彼が3才の時、家に寄り付かなかった父親の記憶はほとんど残っておらず、スコットランドの片田舎で、わがままで、非常識で、プライドが高く人の意見に聞く耳もたない、気性の激しい母親と毎日向き合って暮らしていた。母親は、むら気から時には異常に溺愛したというが、愛情を向けてくれなかった亡き夫を、子供の前で際限も無く罵詈雑言の限りを尽くしてなじり、さらに、そんな夫が産ませた子供がびっこであったのは二重三重の屈辱であったのであろう、わが子を疫病神扱いし、「このびっこの餓鬼

め！」と口汚くののしかったという。ヒステリックな、愛情の欠落した母親に育てられた多感なびっこの少年。びっこであるため絶えず他人の目を気にし、憂鬱な気が晴れることのない少年。愛情のない母親を持ち、頼るべきものを何も持たない孤独な少年。毎日母親の顔色を窺い、冷笑的な目をむける少年。母親の留守に身持ちのよくない乳母が屋敷に連れ込んだいかがわしい連中と憂さ晴らしをする少年。おそらく、カルヴァン主義者のこの乳母から、自分のびっこは、彼の父親や先祖たち——バイロンの大伯父つまり第五代バイロン卿は、領地にからむいさかいからメアリ・チョワースの大伯父を決闘の末殺している——の罪に帰せられ、自分が救われる予定にはなっていないとでも教えこまれ、宗教に依存する気持ちを削がれた少年。この少年が、やがて父親譲りの美しい顔立ちの、英人にしては身長の高い(172cm)、自尊心の高い貧乏貴族の青年に成長してゆくのである。これだけで、バイロンという悲劇的な自意識家が誕生する条件はほとんど揃っていると言えよう。

バイロンの生きた時代は18世紀末から19世紀の初めの四半世紀であった。フランス革命の前年に生まれ、ヨーロッパの近代史の中で最も激動的な時代に育ち、対ナポレオン戦争終結後の、オーストリアのメッテルニヒによる反動政策で人々の自由が厳しく抑え付けられていた時代に生きた。このような保守反動の世の中であって、『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage*) 第一・二巻が世に出た1812年以来突如として社交界の寵児となったバイロンが、異母姉で、すでに結婚していたオーガスタ・リーとのスキャンダラスな関係を、こともあろうに新婚まもない妻とひとつ同じ屋根のもとで続けていたことが世間の知るところとなるや、人々の激しい非難を浴び、英国から出国を余儀なくされることになる。これによってバイロンは近代自我の苦悩の典型的な例証と目されているようである。(註4)

近代自我の問題は、ここではとても取り扱える問題ではないが、わたしが取り上げた初期の三つの小品を鑑賞したかぎりと言えることは以下の点である。わたしは“Fill the Goblet Again”でバイロンの絶望の元凶が彼の内部に宿

る「思惟する存在」あるいは「思惟そのもの」（註5）であることを引き出した。ところで思惟は「我思うゆえに我あり。」の言説で有名なデカルト以来、近代の人間の自立的な存在原理として掲げられ、人間の主体の根幹をなしていた。そしてこの思惟、別言すれば合理主義的思考が、キリスト教の威信を失墜させ、人間がそれまで頼りとしていた外的権威への不信とその否定をもたらした。この結果合理主義的思考はコスモロジーの崩壊を招来し、宇宙や自然と精神的な存在である人間とを切り離れた。人間は自分とは全く結び付きを持たない世界のただ中で孤立してしまう。これによってパスカルの言う「神無き世界に生きる人間の悲惨」が始まる訳だが、それはともかく、この合理主義的思考は次いで人間自身も客体化・物質化し、この結果人間としての「個人」とか「私」が疎んじられ、人間は外的世界からだけでなく、人間内部においても合理主義的思考によって疎外されてしまうのである。すなわち、人間は他ならぬ彼自身の主体の根幹とされていた思惟（合理的思考）によって、疎外されたのである。

バイロンはちょうどこのような思惟（合理主義的思考）が人間にとり憑いた典型的な例であった。バイロンの内部でこの思惟が跋扈して横暴を極め、主体をめぐって感情と激しく攻めぎ合いを繰返していたのである。生涯にわたってそれは続けられたが、とりわけ思惟の猛攻に苦しんだのが、“Fill the Goblet Again”を書いた20才前後の期間であったのであろう。その根拠が次の一節から読み取れるのはわたしだけであろうか。

　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪  
Fill the goblet again! for I never before

　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪　　∪  
Felt the glow which now gladdens my heart to its core;

わたしは先に、形式と内容を一致させずに意図的に履き違えさせることで、バイロンの絶望感が効果的に表わされている例としてこれを挙げたのであるが、

それに加えて、ここにおけるリズムと表面上の字義との隔たりは、主体をめぐる感情と思惟との覇権闘争の具体的な現れであったのである。思惟がことばで「俺はこれほど心底俺の心を喜ばせてくれる快い酔いを一度も感じたことがない。」と紡ぎだしても、感情の方はこれに呼応せず、彼の heart が絶望の淵に沈んで劣勢にあることは明らかだ。(註6) 伝えられるところによれば、その頃バイロンは、かつては僧房であった荒れるに任せた屋敷で、絶望的で放逸な生活にふけり、友や女を集めて酒宴に興じ、頭蓋骨に酒を満たして呑んだという。その数年後の1812年、バイロンを一躍有名にした『チャイルド・ハロルドの巡礼』の出来栄えに確信が持てず、出版を当初躊躇したのも、思惟との対決に決着がついていなかったからであり、彼にとって主体と呼べるものが、思惟(mind)なのか、あるいは感情(heart)なのか判断が出来なかったからであろう。数えきれない女性との恋愛も、異母姉のオーガスタとの肉体関係も、この思惟の存在を忘れるためであった。バイロンが思惟との戦いにようやく休戦をみて、感情をバイロンの主体と見做す契機になっているのが、『マンフレッド』(Manfred, 1817年出版)であるのではなかろうか。そして思惟を馴致させ思うままに御することができるようになったのが、『ドン・ジュアン』(Don Juan, 第一・二巻出版1819年)執筆の頃からであろう。『ドン・ジュアン』で用いられているあのオッターヴァ・リーマ(ottava rima)という詩形式はmindの働きの一つである諧謔の精神を自由自在に駆使する最も適当な形式であるからだ。とは言え、『マンフレッド』も『ドン・ジュアン』もわたしに課された課題である。

最後に、今回初期の三つの小品を鑑賞しながら、バイロンにとって生き地獄であったこの世に彼を留めさせていたのは何だったのかという疑問が湧いた。結論を言えば、月並みだが、それは詩の創作であった、ということになる。例えば、“Fill the Goblet Again”にある in the flow of the soul の表現は実にうまい。これはバイロンより一世代前の同じくロマン派の詩人ウィリア

ム・ブレイクの“Night”の中にある wash'd in life's river を連想させる。この二つともそれぞれの詩人の個性が発揮された詩句であるが、意図していることはほぼ同じである。flow には潮が満ちて来ること・上げ潮とワインとの二つの意味が込められている。ワインが、呑む者を潮が再び満ちてくるように生き返らせてくれるというのである。バイロンはこういう名詞を用いた当意即妙な表現が実にうまい。彼は本来非常に理知的で成熟した知能を持った大人なのである。あるいは、すでに触れた、Fill the goblet again! や May our sins be forgiven の天才的な手際のよさ。今回わずか三篇の作品を味読したにすぎないが、わたしにも彼を創作に駆り立てた突き上げるような衝動が追体験できたことは嬉しい。これがあるからこそ、尋常な人間であればほとんど埋没してしまうほどの、様々な外圧、内圧のなかで、しかも活動期間も極短いにもかかわらず——彼を一躍有名にした『チャイルド・ハロルド』第一巻が出た1812年からギリシャで病死した1824年までの13年間にすぎない——大作を幾つも物し、膨大な書簡を残すことができたのであろう。静寂の中での詩作などまったく望めるべくもない状態で、多分、脳髄が沸騰するままに創作したのではなかろうか。恐らくバイロンがああ思惟する存在を忘れ、陶醉に浸ることが出来た唯一の瞬間がそのような状態での創作過程で時折閃く奥義の一手を天才的な直観で仕上げた時であったのであろう。

そしてここまで辿り着くと、メアリ・ショワースとの初恋が何ゆえ幸福であったかが、ようやく納得できるのである。

Hills of Annesley! bleak and barren,  
Where my thoughtless childhood stray'd,

この thoughtless にはバイロンの万感の思いが込められていたのである。

## 使用したテキスト

BYRON POETICAL WORKS. Edited by Frederick Page, A New Edition, Corrected by John Jump, (Oxford University Press) 1970

## 註

註1. メアリは婿養子を迎えたというのが事実であるようだ。しかしこの作品の設定はメアリが結婚後屋敷から去ったことになっている。

註2. The Poetical Works of Lord Byron. with a Life and Illustrative Notes by William Anderson, (Fullarton & Co.)  
Vol.1 p.15

註3. Byron's Poetry. Selected and Edited by Frank D. McConnel, (Norton) 1978 p.3

註4. 近代自我が自己を呪わしく思うためには、自我が社会と対立し、強烈な反俗の精神を持たねばならないと言われている。このような方面からの解釈は小川和夫先生によって精緻になされている。わたしには近代自我という大きな問題に立ち入る力もないので、今回取り上げた小品の範囲内での解釈に専念したいが、少なくとも、ことわたしが鑑賞した作品においていわゆる近代自我という問題はバイロンの念頭にはない。

註5. 従来これは「自意識」あるいは「自我」と規定されていたものである。'mind' と呼ぶことも可能であるし、「精神」あるいは「考える存在」と呼ぶことも出来るかも知れないが、いずれにせよ 'heart' ないし感性的知覚に対立するもので、ここではデカルト的な意味での、精神実体の属性としての「思惟」が最も当て嵌まりそうなのでそれを用いた。尚、平凡社の哲学事典によると、「思惟」に相当する英語は thinking とある。従って「考えること」が一番よいのかもしれぬが、バイロンが合理主義的思考の被害者あるいは犠牲者であることを論証するためには、デカルト的な用語に沿って進めるのがよいと思い、「思惟」を用いた。後には文脈上適当と思われるところでは「合理主義的思考」

や 'mind' も用いている。

註6. 同様に、“To M. S. G.”において、

Then, Morpheus! envelope my faculties fast,

のように、モルフェウスへの懇願が破格のリズムでなされているのも、思惟によって劣勢を強いられいる感情の悲壮的な叫びを表現したかったのであろう。従って、この faculties は思惟や意識の座としての諸々の精神機能を差している。

#### 参考文献

The Poetical Works of Lord Byron. with a Life and Illustrative Notes by William Anderson, (Fullarton & Co.)

Byron's Poetry. Selected and Edited by Frank D. McConnel, (Norton) 1978

Peter Quennell: Byron The Years of Fame. (The Reprint Society) 1943

Byron A Self-Portrait. Edited by Peter Quennell (Oxford University Press) 1990

The Cambridge History of English Literature. Edited by Sir A. W. Ward and A. R. Waller (Cambridge at the University Press) Vol. X The Nineteenth Century

バイロン 『ドン・ジュアン』 上・下巻 小川和夫訳 富山房 1993年

小川和夫 『近代英文学と知性』 研究社 1951年

小川和夫 『明治文学と近代自我』 南雲堂 1982年

ハーバード・リード 『バイロン』 宮崎孝一訳 研究社 昭和31年

阿部知二 『バイロン』 研究社 英米文学評伝叢書 昭和55年

『バイロン詩集』 阿部知二訳 新潮文庫 昭和49年



- H・G・シェンク 『ロマン主義の精神』 生松敬三・塚本明子訳  
みすず書房 1975年
- 川崎寿彦 『イギリス文学史』 成美堂 1994年
- 高津春繁 『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 1975年
- 中村雄二郎他 『思想史』第二版 東京大学出版会 1991年
- 飯塚勝久 水野建雄 『ヨーロッパ精神史』 北樹出版 1998年
- 中井章子 『ノヴァーリスと自然神秘思想』 創文社 1998年
- 坂田昌一 近藤洋逸 『自然の哲学』 岩波講座哲学 岩波書店 1968年
- フランクリン・バウマー 『近現代ヨーロッパの思想』 鳥越輝昭訳  
大修館書店 1992年
- アレクサンドル・コイレ 『コスモスの崩壊』 野沢協訳 白水社 1999年